

『パリ草稿』についての一考察：科学としての経済学の形成に関する一試論

佐藤, 誠

<https://doi.org/10.15017/4403522>

出版情報：経済學研究. 40 (1), pp.31-48, 1974-04-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

『パリ草稿』についての一考察

——科学としての経済学の形成に関する一試論——

佐 藤 誠

はじめに

1843年10月に領邦国家ドイツからフランスへ移ったマルクスは、パリで、ヨーロッパにおける歴史的危機をみた。ドイツにとっては、近代への道、すなわち資本主義の生成が問題であったが、フランスとイギリスでは、その死滅が問題となりつつあった。歴史のこの二重のきしみを、マルクスがどのような視座からいかにうけとめたかということは、かれの二重の批判、つまりドイツ哲学批判とイギリス経済学批判のなかにその理論的表現を見いだすことができる。それは周知のように『国民経済学批判』という姿をとったのであるが、わたくしはこの著作の草稿および準備ノートを『パリ草稿』と総称し¹⁾、そのなかでマルクスが近代の危機を「どこから(wovon)」「どこへ(wozu)」²⁾ 超えようとする思索的営為をなしたのかを確かめ、あわせて若干の問題を提起してみたいとおもう。

周知のように、『パリ草稿』をめぐる、これまでさまざまな見地からする評価づけがなされてきた。筆者の問題関心との関連で、その主なものをとりあげてみると、ほぼつぎのような意義づけがなされている。

構造主義の代表的な理論家と目されているルイ・アルチュセールは、「疎外というイデオロギー的概念」は、前マルクス主義的概念である

と断言し、パリ時代のマルクスを「いまだに『観念論的な』時期」であり、「フォイエルバッハの『共同体的』ヒューマニズム」³⁾の信奉者と規定している。彼によると、『フォイエルバッハに関するテーゼ』と『ドイツ・イデオロギー』とは《切断期の著作》であり、その後の「『科学の』時期」との関連からみて、『パリ草稿』とは断絶的に認識されねばならないというのである。アルチュセールは、イデオロギーと「歴史科学(史的唯物論)」とをこのように峻別⁴⁾しつつ、さらにその関連性については「この哲学こそ経済学の矛盾を考察することによりそれを解決し、また《経済学》の矛盾をとおして鍵となる一つ概念、すなわち疎外された労働という概念から出発して、《経済学》全体とそのすべてのカテゴリーを考察することによって、それを解決する」⁵⁾というのである。ところで、上の見解に対して批判的なエルンスト・マンデルは、「マルクスの出発点となったのは、疎外された労働の《概念》では決してなかった」⁶⁾と述べ、「疎外された労働が《類的人間》の諸特質と対立させられ、ヘーゲル的な意味での外化ではないにしても、少なくともかつて実在したことのなかった《理念的人間》の否定として、疎外がさしあたり理解されることになるのである」。「疎外のこのような人間学的把握」は、『ドイツ・イデオロギー』で、《類的人間》概念の放棄によって矛盾が除去されるこ

とで、「疎外の歴史的把握」へ至るのであるというのがマンデルのこの問題に関する位置づけである⁷⁾。更にこの問題に関して、ヴォルフガング・ヤーンの見解は分裂的である。彼は、「マルクスは『草稿』において類性を人間の実践、つまり社会的生産におきかえることでフォイエルバッハを克服している⁸⁾と妥当な評価を示しつつも、すぐそのあとで「マルクスは、『草稿』においては、まだフォイエルバッハ的な現実的人間主義の信奉者として現われており」、特定の生産関係の中の人間をみずに、「抽象的人間」を問題にしていると、あい矛盾する見解を表明している⁹⁾。

さまざまな種差をもつ『パリ草稿』の評価にもかかわらず、彼らに共通することは、第一に、パリ時代のマルクスの検討にさいし、彼らもっぱら『第一草稿』の後半の叙述である「疎外された労働」部分にのみ視野を狭く限定したこと、第二に、パリ時代の疎外論の基底的概念として「疎外された労働」をもっぱら高調し、「外化された労働」という隅の頭石には目をむけなかったということ、第三には、この時期の疎外論を、類的人間という本質概念、すなわち抽象的で非歴史的な人間学的概念と対置することによって位置づけたということなどである。

経済学の社会思想史的な再構成の必要性が叫ばれ、経済学の広く社会科学の見地からの再把握を試みる作業が進展してきている今日、マルクスの思想形成過程に照射をあてた多面的な研究が重層的な形で深められてきているが、これら先学による研究の諸成果が、その先鞭をつけた点は、いかに高く評価されてもされすぎることにはなからう。しかしながら、そうした考察も、『パリ草稿』の中に、後の『ドイツ・イデ

オロギー』で十全に展開される唯物論的歴史把握がいかなる形で準備され、論述されていたのか、天才的なひらめきをもってなされたパリ時代のマルクスの辛苦の思索過程を軽視するのであれば、一面的な評価づけであるとの誹りを免がれえないであろう。

マルクスは『ヘーゲル法哲学批判・序説』のなかで、「近代の主要な問題は、政治的世界に対する産業の世界の関係¹⁰⁾であるという見地から、市民社会の経済的疎外の分析にその批判的視座を設定し、完成された私的所有としての産業資本と賃労働との矛盾的対抗関係のなかに、私的所有の運動としての市民社会の疎外の深化と止揚の道をえぐりだそうと試みている。この天才的直覚は、『パリ草稿』において、「全革命運動はその経験的基礎をも理論的基礎をも、私的所有の運動の中に、まさに経済の運動の中に見いだす¹¹⁾という「実証的批判者¹²⁾の立場からの理論に転化されている。そのさい彼は、疎外された労働と外化された労働という二つの最も基礎的な基軸概念を用い、それによって一切の経済学的諸範疇を展開しようと試み、同時に歴史の生成と発展を理論的に把握しようとする構想をいただいていたのである。すでに、宗教的疎外の克服や国家の疎外の止揚による人間の解放を志向せずに、政治的革命に代わる社会的革命による人間解放の途を求めていたマルクスは、市民社会の労働に基礎をおく現実的生活の「経済的疎外」の止揚に、一切の疎外の止揚の根本条件をみだしていたのである。そしてこの経済的疎外の発生根拠を、私的所有に特殊な歴史的活動形態である「分業と交換」に見だし、さらに立入って私的所有の矛盾の本質を、疎外され・外化された労働という労働の二重性のうちに見いだそうとしていたように

思われるのである。

ところで、世界史的展望のもとでのドイツの社会的解放を志向し、経済学の研究を始めたばかりのマルクスが、当時の経済学の状況をどのようにみていたかに、われわれは注目しておかねばならない。彼は、前述の『序説』で、「フランスやイギリスでの問題は、政治経済か、富に対する社会的結合体 (Sozietät) の支配かであるのに対し、ドイツでは国民経済 (National-ökonomie) か国体に対する私的所有の支配かである。」¹³⁾ といっている。

『ライン新聞』時代に、ヘーゲル『法の哲学』に依りつつ、その理論とドイツの歴史的現実との矛盾を洞察し、「国家は理性と法に反する私的所有の手段になりさがる」¹⁴⁾ と、物質的利害と国家の矛盾をすでに問題としていた。更に、英国産業資本に対抗してドイツ産業資本の育成・強化を主張するリストの立場を、「ドイツ国粹主義」であると評価し、彼の『国民経済学』を「こすからい理論 (listig Theorie)」だと諷刺して、これを世界史的観点から拒否した¹⁵⁾。このような批判的見地は『パリ草稿』にまでもちこまれたが、ここでの主要な批判対象は、イギリス「政治経済学」であった。この「近代国民経済学」批判にさいして、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』¹⁶⁾ およびヘスの『貨幣制度論』が、「富に対する社会的結合体の支配」の立場から批判をおこなうための手掛りを提供したと思われる。マルクスはこれらの先駆をより透徹した方法でのりこえ、発生的・批判的な経済学的諸範疇の再展開をもって、科学的な近代国民経済学批判をおこなおうと試みたのであった。

こうみえてくると、前述のマルクスの言葉は、この時期の彼の課題と方法を示唆していること

になりはしないだろうか。そして、その理論的批判の作業においてアルキメデスの一点となつたのが、労働の二重性把握¹⁷⁾ であつたと思われるのである。

この小論は、以上のような問題視角から『パリ草稿』を再検討し、そこから発掘されてくるマルクスの労働と歴史への洞察を浮彫りにし、再評価するために試みたものである。

- 1) 『経哲草稿』と『経済学ノート』とを『パリ草稿』として総称することについてはマクレランによつた。(cf. McLellan, Marx before Marxism, Macmillan & co., 1970.) このことはわが国でも『コメンタール』参加者の間でも市民権を得ている。
- 2) マルクスからルーゲへの手紙, 1843年9月, K. Marx/F. Engels, Werke, Bd. 1 Diez Verlag, Berlin, 1957, S. 343. 『マルクス=エンゲルス全集』, 第1巻, 大月書店, 1959年, 380頁。(以下, Werke および『全集』とする。)
- 3) Louis Althusser, Pour Marx, François Maspero, 1965. 河野・田村訳, 『甦るマルクス (I), (II)』, 人文書院, 1968年。(I), 41頁および (II), 151頁を参照。
- 4) 同上書, (I), 40~42頁。
- 5) 同上書, (II), 50頁。
- 6) Ernst Mandel, La Formation de la Pensée Economique de K. Marx, François Maspero, 1967. 山内・表訳, 河出書房新社, 1971年, 218頁。
- 7) 同上書, 221~2頁。
- 8) Wolfgang Jahn, Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von K. Marx, in; Wirtschaftswissenschaft, Nr. 6, 1957, S. 855.
- 9) ibid., S. 862., S. 865.
- 10) 『ヘーゲル法哲学批判・序説』, cf. Werke, 1, S. 382. 『全集』, 第1巻, 419頁参照。
- 11) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, in Werke, Ergänzungsband, Erster Teil, 1965, S. 536. 城塚・田中訳, 『経済学・哲学草稿』, 岩波文庫, 131頁。(以下, Ergänzungsband, I. および『草

稿』と略記する。)なお、この著作は K. Marx/F. Engels historisch-kritische Gesamtausgabe, Erster Abteilung, Bd. 3, Marx-Engels-Verlag, G. M. B. H., Berlin, 1932, (以下, MEGA., I, 3. と略記する。) S. 31 では, „Zur Kritik der Nationalökonomie, mit einem Schlusskapitel über die hegelsche Philosophie“ (『ヘーゲル哲学についての終章のついた国民経済学の批判』)の表題がつけられている。

- 12) Ergänzungsband, I, S. 468.『草稿』, 12頁。
- 13) Werke, 1., S. 382.『全集』, 第1巻, 419頁。
(強調点は原文のもの。以下, 断わらない場合は全て原文によるものである。)
- 14) 『第6回ライン州議会の議事』, ct. Werke, 1, S. 126.『全集』, 第1巻, 146頁参照。
- 15) Werke, 1, S. 382.『全集』, 第1巻, 419頁。
- 16) エンゲルスの『大綱』は, フォイエルバッハの『キリスト教の本質』の圧倒的影響下での, 感性的で対象的な類的人間の疎外観点にたつ宗教的疎外論の経済学批判への適用とみなされうる。後者が上下2部それぞれに, 宗教, 神の人間本質への解消と, 顛倒した宗教世界を合理化する神学の倒錯性の暴露に分かれているように, 前者も, 経済的疎外の自然と人間の分裂という本質への解消, および経済学の不道徳性の暴露に二分されている。この点に関して, 副田満輝, 「経済学批判の成立——批判原理の生成——」, 『経済学研究』, 第15巻, 第1, 2号, 九州大学1949年を参照。
- 17) 価値の二重性にあらわれる労働の二重性の把握とこれを跳躍点とする経済学的諸範疇の展開についてマルクスは, 1859年の『経済学批判』で明確な規定をしているが, エンゲルス宛ての手紙でも「私の著作での最良の部分は, 第一に(事実の解明がすべてこれに結びついている)……労働の二重性——それによって労働は使用価値と交換価値として顕現する——である」(cf. Werke, 31, S. 326.)と述べている。その萌芽が『パリ草稿』と『哲学の貧困』等に見られるのである。

I

まず, 一般的な概観からはじめてみることにしよう。パリの地で本格的な経済学の研究を開始したマルクスは, 44年2月の突然の追放の二

日前に, C・レスケと『政治と国民経済学の批判』出版の契約をかかわした¹⁾。

病床にあったA・ルーゲに代わって『独仏年誌』の実質的な編集責任者であったころ, エンゲルスの『国民経済学批判大綱』(Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie) およびヘスの『貨幣制度論』(Geldwesen)を読んだマルクスが, その刺激を受けて, 研究に一層の拍車をかけたであろうことは, 想像に難くない²⁾。その研究成果が44年末から45年始めに, 印刷にまわしうるかなりな完成度を有していたということは, エンゲルスのマルクス宛ての手紙でわかる。エンゲルスは44年10月と45年1月に, 「君の集めた素材をすぐにも世に出すようにしたまえ」³⁾, 「さっさと君の国民経済学の著作(nationalökonomisches Buch)を仕上げてしまいたまえ」⁴⁾と出版の催促をしている。その成果が『パリ草稿』であるが, 今日われわれが利用しうるものは, 『第1草稿』と, 経済学的諸範疇の発生を叙述している本論部分であり, そのほとんどの部分が喪失してしまったといわれている『第2草稿』の一部, 本論への附論および準備ノートである『第3草稿』, および経済学の抜萃・評註⁵⁾に限られている。

さて, 『第1草稿』の理論上の特徴は, 一口でいって, それが分析的であることである。国民経済学が前提とした資本の利潤, 地代, 労賃という資本制社会の三大所得の対比的分析から始まっている。すなわち, 資本家, 地主, 賃労働者の階級間および同一階級内部の相互敵対的競争関係の分析から, マルクスは「資本が集積された労働」⁶⁾であることを見抜き, ついで「一方での労働の分割と他方での資本の集積」⁷⁾が相互規定的に運動する過程が, 労働を「抽象的労働へ還元」させ, 「営利労働という形態」⁸⁾を

とらせることを分析している。これとからめて、労働者の生活や労働そのもののさまざまな疎外が明らかにされ、また資本家自身も、「自分の死せる〔財産の神〕マンモンの獲得のために苦しむ」点で、「営利労働」の疎外をこうむっているとしている⁹⁾。注目すべき点は、これら一切の疎外現象のなかで、本来商品たりえない人間の労働が、商品に転化していることを批判していることにある。すなわち、「労働は自由な取引の、自由な結果ではない」¹⁰⁾のに、「労働に対する資本の支配」の完成のもとでは、本来譲渡しえない人間の本質までもが商品として売買されることを、マルクスは国民経済学の諸原理からみても矛盾していると指摘していることである。そしてまた労働投下物ではない、自然そのものとしての土地が、商品取引されることの内にも、同様の矛盾が存することを喝破している。つまり、「人間と同じく土地も商品取引の価値にまで転落する」¹¹⁾。この「土地所有の商品への転化」¹²⁾にともなって、封建的土地占有に基づく地主階級の経済地盤の崩壊という事態が生じた。私的所有の源古形態だった土地所有が、私的所有の完成態である産業資本に包摂されたことが、資本の下での人間の包摂とあわせて、一切の私的所有関係が「労働者階級と資本家階級」の「搾取者と被搾取者との国民経済学的関係への還元」¹³⁾をもたらしたと指摘しているのである。

こうして「自分の所有に対する所有者の人格的關係が、全て廃棄され、その所有がただ事物的な物質的な富となり……人間に対する死んだ物質の完全な支配」¹⁴⁾が現出したのである。「人間の真の人格的所有」関係が完全に顛倒され「一切の疎外」が現出すると同時に、「貨幣貴族制の最終的完成」としての、「貨幣制度」

が確立したのであった。マルクスはこのようにして、三大諸階級の競争関係という表面的な現象から、私的所有の物質的運動を分析的に析出したのであった。

ところで、この分析的な下向は叙述の進行とともに、更に抽象的な次元にまで押し進められている。彼は私的所有の運動の「物質的過程」の内的連関を探究し、「国民経済学上の現に存在する事実」としての、「一切の疎外と貨幣制度」の現実的諸矛盾を、労働の二重性論にまで深め、それらの本質的連関の概念的把握を試みているのである。そのため彼は、国民経済学の経済学方法論を批判的に検討し、自らの弁証法的方法を提示しようとしている。

マルクスは国民経済学がまず、資本・土地所有の「諸形態 (Formen)」を所与の前提としてそれを帰納的分析によって統一性にまで還元、「諸公式 (Formeln)」をひきだし、それを「法則」として、そこから演繹的に現実を説明する非歴史性を突いている。これに対して、マルクスはまず、歴史的現実的な私的所有の矛盾的諸関連を背後から規定する内的紐帯へと下向しつつ、ついには最も抽象的かつ基底の矛盾としての二つの規定＝「二動因」に到達した。そしてまた、この基底的な二動因をバネにその必然的展開過程として、私的所有の諸形態を、発生的・批判的に再構築することによって、現実の歴史的諸形態を再把握しようとした。つまり彼は私的所有の諸形態を、偶然的な事実として認めるのではなく、私的所有の運動の因果連関を通して、実現する基底の矛盾の必然的な展開形態として概念的に把握しようとしたのである。このことをマルクスは、「一切の疎外」と「貨幣制度」という「国民経済学的事実 (Faktum)」を分析し、その基底に「疎外され

た、外化された労働 (entfremdet-entäußerte Arbeit) という概念」を見だし、「この二つの動因 (Faktoren) を使って、国民経済学上の全ての範疇を展開することができる。そこでわれわれには……各範疇において、ただこれら二つの最初の基礎の特定の、そして発展せられた表現を、再発見するだけであろう」と表現している¹⁵⁾。とすれば、まさにこのことが、マルクスがとらえた国民経済学批判の方法的軸心であったことになる。

国民経済学批判の方法的視座をこのように設定したマルクスは、さらに立入って、まず「一切の疎外と貨幣制度とその本質的連関を概念的に把握しなければならない」とあらたに課題を設定し、ここではじめて疎外の4規定、すなわち①「事物の疎外」②労働の「自己疎外」③「類からの疎外」④「人間からの人間の疎外」をもちだしてくるのである¹⁶⁾。

結論を先取りすることになるが、このときマルクスは、すでにフォイエルバッハの「類的本質 (Gattungswesen)」を、「自然存在 (Naturwesen)」の側面と「共同存在 (Gemeinwesen)」の側面の両側面をもつ「人間達の活動総体 (Gesamtwirken der Menschen)」として、「類的存在」=「社会 (Gesellschaft)」として、理解し直していたのである。いかえれば、マルクスはそれ自身自然存在である人間を、その「非有機的肉体」である自然との関係行為の側面と人間相互間の社会的関係行為の側面との統一として、自然=人間=社会の活動総体として再把握し、そのことを疎外の四規定のうちに見いだしたのである。①と②と③とは自然存在の側面における人間の、物質代謝過程に本源的な欲求—活動—享受のトリアーデにおける「一切の疎外」の規定である。また③と④とは、共同

存在的側面における人間相互間の「社会的交通」、貨幣を媒介とする商品と商品の物的関係、この外的関連のなかで「我と汝」の人格的関連が見喪なわれるより高次の、外的現象たる「貨幣制度」を規定したものである。商品交換社会の二側面における人間活動の疎外は、統一における区別として、同一の過程で生じる二側面であることを、マルクスは「労働者 (労働) と生産の間の直接的関係」¹⁷⁾ を考察することによって、二側面における労働の本源的関係行為の顛倒性 (広義の疎外)¹⁸⁾ として明確に把握しえたのである。

物質代謝過程での人間と自然との関係行為において、その生産物から、また欲求—活動—享受の活動的連関からの疎外は、「疎外された労働」という概念として把握された。また人間相互の社会的関係行為は、「外化された労働」として扱えられた。こうして私的所有の運動の本質を、この労働の二重性で扱えたマルクスは、これらの基礎概念から経済学的諸範疇の展開をなしうるとしている。人間は「製作活動的に、現実に自己を二重化する (verdoppeln)」存在である。一面では「人間の自己及び自然からの自己疎外」において、他面では「外的関係行為としての外化された労働」においてである¹⁹⁾。同様な見解は、『ドイツ・イデオロギー』でも見いだしうる。すなわち、「生活における生産は、とりもなおさず一個の二重的な関係行為 (ein doppeltes Verhältnis) として、——すなわち、一面では自然的関係行為として、他面では社会的関係行為として——あらわれる」²⁰⁾ と。しかしながら、両側面は一個同一の過程における区別にすぎず、「自己および自然からの一切の疎外は、人間が自己および自然を自分とは区別された他人達に与える (外的な——引用

者) 関係行為のなかで生じる』²¹⁾ という内的連関を有している。このことはまた、外化され、譲渡された労働が、他人の一方的獲得と化する事実から、「外化された労働の物質的な、総括的な表現としての私的所有」の概念が検出されたことを意味しているのである²²⁾。

『パリ草稿』と『ドイツ・イデオロギー』の労働把握の関連性についてみてきたわれわれは、ここであらためて、「唯物論的な歴史把握」²³⁾の方法、すなわちマルクスの唯物史観の形成過程について言及しておかねばなるまい。それは、ブリッセル時代の歴史研究の成果なのか、それともパリ時代の労働本質論や分業論の研究の必然的結果なのか、両者はそれぞれ相矛盾する問題意識を前提としているのかどうかという疑問の解明のためである。節を改めてこのことを考察してみよう。

- 1) 契約書の内容については、cf. Werke, 27, S. 669. 『全集』, 第27巻, 592頁を参照。少し遅れてマルクスは契約金の半金を受けとっている。(cf. ibid., S. 448. 同上書, 386頁参照。) 46年8月のマルクスからレスケ宛の手紙によれば、この著作は、その半年前までに第1巻の20ボーゲン以上が完成し、全2巻で約60ボーゲン(原書で約960頁)となる見通しだったようである。(cf. ibid., S. 450. 同上書, 387頁参照。) この内容を推察するうえでわれわれが利用しうるのは、『パリ草稿』全部で約17ボーゲン分にすぎない。
- 2) マクレランは、ヘスの証言をもとに、『独仏年誌』編集段階ですでに、マルクスが『貨幣制度論』の大部分の原稿を読んだものとみて、『草稿』以前の著作にヘスの影響をみとめようとしている。cf. D. McLellan, *The Young Hegelians and Karl Marx*, Macmillan, London. Melbourne. Tronte, 1969, pp. 153~5.
- 3) Werke, 27, S. 8. 『全集』, 第27巻, 27頁。
- 4) ibid., S. 16. 同上書, 15~6頁。
- 5) *Aus dem Exzeptheften* (Paris, Anfang 1844~45), in MEGA., I, 3, SS. 435~583. 編集者は『経済学研究 (Ökonomische Studien)』

の表題をつけている。(cf. ibid., S. 435.)

- 杉原, 重田訳, 『経済学ノート』, 未来社, 第2版, 1970年。(以下、『ノート』と略記する。)
- 6) *Ergänzungsband*, 1, S. 473. 『草稿』, 21頁。
 - 7) ibid., S. 473. 同上書, 22頁。
 - 8) ibid., S. 478. 同上書, 28頁。
 - 9) ibid., S. 473. 同上書, 20頁。
 - 10) ibid., S. 482. 同上書, 36頁。
 - 11)~14) ibid., SS. 505~6. 同上書, 76~8頁。
 - 15) ibid., S. 521. 同上書, 104頁。傍点は引用者による。疎外現象の基底に、エンゲルスは、「二要素 (zwei Elemente)」をみる (cf. Werke, 1, S. 509. 『全集』, 第1巻, 533頁参照。) のに対して、マルクスは「二動因 (zwei Faktoren)」をみい出している。また、「国民経済学者 (Nationalökonom)」が動かす唯一の車輪は、所有欲であり、…競争である」(cf. *Ergänzungsband I*, S. 511. 『草稿』85頁参照。) のに対して、マルクスの論理の両輪は「疎外された、外化された労働」概念であり、範疇展開のバネとしての「二動因」であった。
 - 16) *Ergänzungsband*, 1, SS. 515~8. 『草稿』, 93~8頁。
 - 17) ibid., S. 513. 同上書, 90頁。
 - 18) ここにいう広義の疎外とは、「一切の疎外」と「貨幣制度」を含み、意識と欲求と活動の、自然=人間=社会総体における本源的活動行為の顛倒を意味し、そのいみで「外化」をも包括する。狭義の疎外とは、「対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工」における、自然的存在としての人間の自己確証行為の疎外であり、社会的存在としての人間の「相互規定的な疎外」=「外化」に対して、「自己疎外として自己疎外の姿態をとって現象せしめる」疎外である。(それぞれ、cf. *Ergänzungsband*, 1, S. 516. 『草稿』, 96頁。および、MEGA., I, 3, S. 541. 『ノート』, 106頁を参照。)
 - 19) *Ergänzungsband*, 1, S. 517. 『草稿』, 97頁。
 - 20) K. Marx/F. Engels, *Die deutsche Ideologie*, in Werke, 3, S. 29. 『全集』, 第3巻, 25頁。
 - 21) *Ergänzungsband*, 1., SS. 519~20. 『草稿』, 101~2頁。
 - 22) ibid., S. 522. 同上書, 106頁。
 - 23) エンゲルスは、「導きの糸となった一般の結論」

をさして、「科学的で自立的なドイツ経済学、このドイツ経済学がそれに本質的に基くところの唯物論的な歴史把握 (materialistische Auffassung der Geschichte)」と評している。(『経済学批判』への書評。cf. Werke, 13, S. 469.) ここにいわゆる「唯物史観」なる用語の源がある。

II

改めて述べるまでもないが、『経済学批判』の序言で、マルクスは経済学研究の「導きの糸となった一般的結論」を定式化し、そのさいエンゲルスも別の経路をへて45年3月までに「同一の結論に到達していた」と述べている。そして「われわれの見解の決定的な点は……『哲学の貧困』のもとで、はじめて科学的に示された」とつけ加えている¹⁾。マルクスは45年2月にパリを離れたが、パリとブリュッセルの距離はそう遠くなかった。エンゲルスは唯物史観の成立期を回顧して『共産党宣言』1888年英語版・序文において、「われわれは二人とも1845年の二、三年前から、次第にこの命題に近づいていた。……しかし1845年の春に、私がブリュッセルでマルクスと再会した時には、彼はこの命題を完成して、私が右に述べた(『宣言』の唯物史観の根本命題の要約——引用者)のほとんど同じくらいに明瞭な言葉で私に語りかかせていたのであった²⁾」と。マルクス自身も、46年8月のレスケへの手紙で、『国民経済学批判』の出版を遅延させた『ドイツ・イデオロギー』(45年秋から46年春まで執筆)について、「これまでのドイツ科学に真正面から対立する私の経済学の立場に一般読者の目を向けさせるためには、この「論争の書」を先に出すことが必要だったと述べている³⁾。この両書が出版されえなかった理由、およびフォイエルバッハの表現の利用、そして又彼への批判を表面上極

力おさえた理由に関しては、若い二人の疾風怒濤時代のドイツ的共産主義運動の特殊な状況と、それへの配慮を抜きにしては考えられないであろう。三月革命前の「観念の国」であるドイツでは、フォイエルバッハが最も広範に理論的な支持を受けていた。バウアーやルゲ等と決裂し、真正社会主義者達とも論敵関係にあるなかで、エンゲルス一人が確かな盟友であったマルクスの出版活動は、さまざまな妨害を蒙らざるを得なかった。46年12月にアンネコフに宛てた手紙で、両著の出版が出来ないことの原因を、「それらの困難は一方では警察の側から、他方では出版業者の側から生じ、しかも当の業者自身が私が攻撃しているすべての傾向の利益代表者なのです⁴⁾」と説明している。当時マルクスは、立場は異なるがバウアーやルゲとの対決の際に自分を援護してくれてきたフォイエルバッハとの連携を欲し、彼への全面的な批判を禁欲していたのである⁵⁾。にもかかわらずマルクスは、『パリ草稿』でも、「感性的意識と感性的欲求」の両側面から出発する「現実的な科学」の立場に立って、名前こそ伏せてはいるが、人間の欲求—活動—享受の「人間的労働のこの偉大な部分を上品に捨棄し、感性的意識の面しかみないフォイエルバッハの科学は、「心理学」にすぎず、決して「実在的な科学になることは出来ない」と断じている⁶⁾。

「宗教・家族・国家・法律・道徳・科学・芸術等々は、特殊な生産諸様式 (besondere Weisen der Produktion) にすぎず、(「私的所有の運動——生産と消費」の) 生産の一般的法則 (allgemeines Gesetz) の適用を受ける⁷⁾」と定式化することによりマルクスは、『パリ草稿』で全歴史を、私的所有の物質的運動過程として、唯物論的に把握する途を切開いている。

「全革命運動はその経験的基礎をも理論的基礎をも、私的所有の運動のなかに、まさに経済の運動のなかに見いだす」⁸⁾。この意味することは、経済学・階級理論を歴史主義的にとらえたことを裏書きするものである。後の『ドイツ・イデオロギー』、『哲学の貧困』および『共産党宣言』等々で、豊富な素材をもって、より明確に科学的に叙述されるようになったかれの歴史理論は、ほかならぬ労働の二重性理解に基く分業展開史として『パリ草稿』でも、端初的に萌芽的な姿をもって描きだされている、といわざるをえない。このマルクスの思想展開に、ヘーゲル弁証法の批判的摂取が内在していることはいうまでもない。

国民経済学では「生産・消費、また両者の媒介者たる交換、もしくは配分とがバラバラになっている」⁹⁾が、マルクスは、この連関を統一的に把握しようとして、ヘーゲルの「抽象的・精神的労働」の弁証法を対象化の弁証法として改作しているのである。マルクスは「真に理論的革命を内に含んでいる」『精神現象学』と『論理学』の「合理的核心」を、「運動し産出する原理としての否定性の弁証法において——偉大なるものは何んといっても、ヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程として把え、対象化を非対象化として、外化として、そしてこの外化の止揚として把えているということ、——こうして彼が労働の本質を把え、対象的人間を活動的であるが故に真なる人間を、人間自身の労働の成果として概念的に把握しているということである」¹⁰⁾と述べている。このマルクスによるヘーゲルの読みこみが、人間の生活が彼自身の労働による自己の創造物であること、いかえれば人間存在の自立性を「自分の現存を自己自身に負う」ところの、労働をその本質にもつ労働

の成果としての人間理解を、マルクスに洞察させているのである。抽象的な人間理解の根は、その本質概念が労働によって裏づけられたことでここで断たれているのである¹¹⁾。

「対象化」が「非対象化」に転じる、この顛倒は、ほかならぬ「疎外化」を意味し、「外化の止揚」とは「讓渡」である¹²⁾。こうしてマルクスは、現実の労働を、「疎外化」および「外化・讓渡」の二側面をもつ一個の活動の疎外・外化形態として把握している。外化・讓渡の活動とは、「類的組織としての人間に対応する人間の現実的・活動的な関係行為」の倒錯的活動形態であり、「疎外化」の活動とは、「一個の活動的な類的存在としての、すなわち人間存在としての人間の実証活動」の顛倒的活動形態である。人間相互間の社会的活動、また人間と自然間の物質代謝活動は、「ただ人間が現実的に、全てのその類的諸力——これはまた人間達の活動総体によってのみ、歴史の結果としてのみ可能なのであるが——を創り出す」¹³⁾。マルクスはこのように把握して、自然＝人間＝社会の存在構造とその運動過程を、「人間達の活動総体 (Gesamtwirken der Menschen)」という概念で把握しているのである。フォイエルバッハの「類的本質」概念とヘーゲル弁証法は、マルクスによって批判的に統一され、市民社会の把握のための独自の鍵概念が検出されているのである。しかも「全ての人間的な類的諸力はさしあたっては再び、疎外の形態においてのみ可能なのである」との見地へと展開されている。ここに工場制度の姿をとって現われる歴史的現実のさまざまな矛盾現象の奥底に、私的所有の普遍的性格を認めるマルクスの鋭い洞察が示されることになっているのである。

とすれば、『フォイエルバッハに関するテー

ゼ』と、この「活動総体」把握との間に認識論的断絶を見る見解は、皮相的なものであるといわざるを得まい。第1～第5テーゼの「感性的活動」・「実践」の立場の表明。第6テーゼの「社会的諸関係の総体 (Ensemble)」としての「人間の本質」理解。第7テーゼの「社会的産物」としての宗教理解。第8テーゼの、自己を労働の結果として把握し、存在根拠を自己の労働のうち確実に見出すことによる、「理論を神秘主義に誘いこむすべての神秘」の合理的解消。第9～第10テーゼの『『市民社会』での個々の個人の直観』に対する「活動総体」としての、「人間の社会」・「社会化された人類」の唯物論的立場の声明。第11テーゼの、単なる哲学的な「解釈」に代って、私的所有の物質的運動の中に、その「経験的基礎と理論的基礎」を見出す世界「変革」の必要性の思想の寸描¹⁴⁾。

これらを総括してみたいことは、『テーゼ』の内容は、『パリ草稿』の理論内容と両立しうるものであるということができよう。経済的下部構造の「生産の一般的法則」の適用を受ける、「特殊な生産諸様式」としての上部構造把握や、「活動総体」としての自然＝人間＝社会の総体的理解、さらには「経済的疎外」そのものの内に社会的＝人間的解放の客観的諸条件が存するとの洞察が¹⁵⁾、『パリ草稿』の中で珠玉の光をはなっているのである。

しかしながら、後にマルクス自身が述べているように、「実際、分析によって宗教的幻想の地上的核心を見出すことは、その逆に、その時々の実生活諸関係から、その天上化された諸形態を展開することよりも、はるかに容易である。後者が唯一の唯物論的な、従ってまた科学的な方法である」¹⁶⁾。この叙述の方法こそ問題であった。

マルクスによるヘーゲル弁証法の批判的撰取の過程は、すでにのべた「二動因」からいかにして私的所有の運動を、経済学的諸範疇の形態を諸転化の過程として、発生的に叙述するのかという理論的課題の解決のためであったことを、視点をかえてさらにこのことを確かめるために、『第2草稿』付論や準備素材に散見できる分業論および歴史理論を検討せねばならない。そのばあいの分析の比重は、私的所有物（商品）の二重的性格、労働の二重性理解による文明史の概念的把握、「工場制度」の歴史的意義の分業論的理解におかれることになる。

- 1) Werke, 13, S. 10.『経済学批判』, 国民文庫版 11頁。
- 2) Werke, 4, S. 581.『全集』, 第4巻, 598頁。
- 3) 46年8月1日付けの、レスケ宛てのマルクスの手紙, cf. Werke, 27, S. 449.『全集』, 第27巻, 386頁。
- 4) ibid., S. 462. 同上書, 39頁。
- 5) Werner Schuffenhauer, Feuerbach und der junge Marx, VEB. Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin, 1965, この第4章「フォイエルバッハとの共同戦線をめざすマルクスの努力」を参照。
- 6) Ergänzungsband, 1, S. 543.『草稿』, 142～3頁。
- 7) 8) ibid., SS. 536～7. 同上書, 131～2頁。
- 9) MEGA., I, 3, S. 540.『ノート』, 106頁。
- 10) Ergänzungsband, 1, S. 574.『草稿』, 199頁。
- 11) ibid., S. 545. 同上書, 145頁。
- 12) ibid., S. 531. 同上書, 120頁。ちなみに、『ユダヤ人問題について』では、「譲渡は外化の実践である」(cf. Werke, 1, S. 376,『全集』, 第1巻, 413頁参照。)といている。
- 13) ibid., S. 574, 同上書, 199頁。
- 14) 『フォイエルバッハに関するテーゼ』(1845年3月)。cf. Werke, 3, SS. 533～5, 松村訳, 岩波文庫, 86～90頁参照。
- 15) マルクスがフォイエルバッハから受けた影響は、単に、『キリスト教の本質』の類的疎外論にとどまっていない。「表象によって与えられた対象を、その起源を研究する」, あるいは、諸現象

の諸表象から、「実在的な認識規定」に至る「発生的・批判的哲学 (genetisch-kritische Philosophie)」の分析方法をも受容している事に留意すべきである。しかしながら、フォイエルバッハ自身は感性的直観＝反省の立場にとどまっている。(cf. L. Feuerbach, Zur Kritik der Hegelschen Philosophie, in L. Feuerbach Sämtliche Werke, Bd. 2., S. 194.) なお、拙稿『「3月前」期ドイツにおけるフォイエルバッハとマルクス』(『経済論究』, 九大経済大学院, 第25号)を参照。

- 16) Das Kapital, Bd. I, Diez Verlag, 1965, S. 389. 向坂訳, 『資本論』, 第1巻, 岩波文庫, 第3分冊, 108頁。

III

『ミル評註』においてマルクスは、「私的所有はなぜ貨幣制度 (Geldwesen) にまで進まねばならぬのであろうか」と問い、それは、社会的存在としての諸個人の「社会的交通」の必然性によって——人間相互の人格的關係が、「私的[・]所有物と私的[・]所有物との[・]抽象的[・]な[・]関係[・]行為」という物象的な交換関係として現象するからであると述べている¹⁾。また「交換もしくは交換取引は、私的[・]所有の枠内での人間[・]の[・]社会的[・]交通であり、またその故に[・]外的[・]な[・]、[・]外化[・]された[・]類[・]的(=組織的)行為である²⁾と説明している。だがマルクスの思索はここに止まっているのではない。断片的ではあるが、苦渋に満ちた素朴な商品価値論の思考が、『大綱』の研究から得た知識と合わせて、次のように前進した形でうち出されている。

商品の「[・]現実的[・]価値 (Realwert)」=「[・]有用性 (Brauchbarkeit)」³⁾の面は、私的[・]所有物の「[・]独自の[・]定在」=「[・]直接的[・]定在」=「[・]特殊な[・]実在」=「[・]特殊な[・]性質」であると把握され、また「[・]交換[・]価値」=「[・]生産費⁴⁾」面は、「[・]等[・]価値 (Äquivalent)としての私的[・]所有物の[・]定在」=「[・]価値と

しての[・]定在」=「[・]交換[・]価値」=「[・]外的[・]な[・]外化[・]された[・]規定」=「[・]相対的[・]な[・]定在⁵⁾」として区別しておさえられている。すなわち、「二人の私的[・]所有者を相互[・]に[・]関連[・]させ[・]あ[・]う[・]紐[・]帯[・]は、両者の私的[・]所有物の[・]素材である[・]対象の、[・]特殊な[・]性質である」他者の商品の有用性をわがもの[・]と[・]したい[・]欲[・]求[・]に[・]かり[・]た[・]て[・]ら[・]れ[・]て、両者が相互[・]に[・]自分[・]の[・]所有物を「[・]放棄[・]する (aufgeben)」という、まさにその「[・]外化[・]の[・]相互[・]規定性」こそが、商品交換社会の社会的[・]関係[・]行為[・]なのである。それゆえに私的[・]所有物の[・]代表者 (Repräsentant)として、また一個の異なる[・]性質の[・]生産物の[・]同[・]等物 (Gleiche)として、これら両面において現われる。そしてこの両面は、各人がその異なるもの (Andern)の定在を代表し、また両者がこもごも自分自身のものと、その異なるものとの引換え人 (Ersatzmann)として、相互[・]に[・]関連[・]し[・]あ[・]っ[・]て[・]いる」のである。「かくして私的[・]所有物としての私的[・]所有物の[・]定在は、引換え物 (Ersatz)、つまり等価値になる⁶⁾」このような把握が、商品の二重性についての素朴であるが、深い洞察を示していることは、いうまでもないことであろう。商品の歴史的[・]特殊性は、使用[・]価値的[・]側面においてではなくて、他ならぬ交換[・]価値的[・]側面において現われる[・]ほ[・]か[・]は[・]な[・]い[・]から[・]である。

アポリアは乗越えられようとしている。疎外された労働は、労働主体の疎外にもかかわらず对象的[・]自然への働きかけを通じて、具体的[・]有用物を産出するように、外化された労働は、商品生産の特殊[・]歴史的[・]な[・]関係の中で、価値、交換[・]価値に[・]転[・]変[・]させ[・]られ[・]つつ、その物象的[・]関係において社会的[・]交通を実現しているのである。「私的[・]所有物の[・]価値としての[・]定在は、私的[・]所有の[・]直接的[・]定在と[・]区別[・]された、私的[・]所有物の[・]特殊な[・]実在にとつて、1個の[・]外的[・]な、つまり、私的[・]所有そ

れ自身の外化された一個の規定にすぎない。いいかえれば、私的所有物の一個の相対的な定在にすぎない⁷⁾のである。しかしながら、私的所有物相互間の「この抽象的な関係行為が価値であって、この価値としての真に現実的な現存 (wirkliche Existenz) が貨幣である。……私的所有物の私的所有物に対する社会的な関係行為の対自的現存、即ち貨幣は私的所有の外化であり、私的所有物の特殊な人格的な性質の抽象である⁸⁾」資本論にみられるような価値形態論および貨幣論の展開は、もちろんこの準備的評註のなかにはないがそこには天才のすぐれた洞察が横たわっているのである。

さて、以上述べた「交換の関係を前提とすれば、労働は直接に営利をめざす労働 (Erwerbsarbeit) = 「疎外された労働⁹⁾」になる。この交換営利労働が歴史の推進力であることの次第を、マルクスの説明の中にみてゆこう。まず交換以前の、本源的共同態社会では、生産の限度は、直接的欲求の狭い範囲に限られ、「人間の欲求の限度が、すなわちその生産の限度である」。この状態から、「ひとたび交換が発生するや、ただちに占有の直接的限度をこえる剰余生産が生ずる¹⁰⁾」のである。この「外化された私的所有、すなわち交換取引の原初の形態 (rohe Gestalt)」においては、各自はその「欲求」と「資質」と「手持ちの自然的素材」とに従って生産し、その直接的占有をこえる分のみを交換したにすぎない。従って交換者相互の「労働は彼の直接の生計の源泉であったけれども、併し同時に彼らの独自の実存の確証でもあった¹¹⁾」。この状態は、共同態の内外における交換を通じて、直接に交換をめざす「交換取引・掛値売買」という「外化された労働」の第1の歴史的な形態へと転化する。このことが同時に、「欲

求と労働の規定性」の分裂、および「労働の目的と定在」の分離を伴う「営利労働」という「疎外された労働」の同様な形態転化をもたらした¹³⁾。その過程はまた以下のように言いかえることもできる。

社会的交通が、物の交換に転化する過程は同時に、「人間の労働の統一性 (Einheit) がひたすら分割とみなされる」過程でもある。ここで、「外化された労働」は「交換」に、「疎外された労働」は「労働の分割」に形態転化し、「文明 (Zivilisation) の進歩につれて労働の分割は高度化する」のである。このようにして、「文明社会」=「市民社会」(zivilisierte Gesellschaft) の発展は、「交換」と「分割」という労働の二面性の矛盾の展開史として、私的所有物の運動史として位置づけられることとなった¹⁴⁾。本源的共同態での「人格の人格に対する支配」の社会関係、商品生産社会での「等価物・価値」という「私的所有の外化の規定」の下での社会関係、そしてさらに「全関係行為の頂点」に、本来譲渡されえない土地や人間までもが、他の労働生産物と同じく譲渡される商品となり、ここに貨幣の一元的支配¹⁵⁾が、すなわち「事物の人格に対する、生産物の生産者に対する普遍的な支配」が現象することになるのである¹⁶⁾。この歴史的過程を通じて「外化された労働」は、「剰余生産物」、「等価値・価値」という形態発展をとげ、より発展した「貨幣・手形・紙幣・紙製の貨幣代理物・信用・銀行制度¹⁷⁾」という普遍的な諸形態をとって現象してくる。他方、「疎外された労働」は、欲求と労働の一致、生計労働と労働主体における固有な実存の確証の一致段階から、「営利労働」(「労働の目的と定在の分離」)=「労働の分割」(人間を「抽象的な存在」にし、「精神的・肉体的不

具者にかえる)の形態へと展開し、「労働の分割の高度化」・「活動と享受の分裂」の完遂態をうけとるにいたる¹⁸⁾。

『評註』でのマルクスは、この人間の共同存在の側面、「人間的社会的な行為」の側面を、「交換」として、また「労働の配分(Distribution der Arbeit)」として、「ものとの関係行為」として、物象化の側面で捉え、これを「外化された労働」=「外化」という基底的動因から発生する歴史的諸形態として概念的に把握しようとしている。この外化の進展は、「生産の多面化」・「生産者の欲求の多面化」をもたらす。したがって疎外の進展、つまり「生産者の仕事の一面化」・「営利労働の範疇への包括」・「活動と直接的な享受や人格的な欲求の関係」との疎外の進展をもたらす「労働行為そのものが、生産者にとって、自己の人たることを自ら享受することであり、自己の自然的資源や精神的目的の実現である、といったことは、全く偶然的で非本質的なことになる」という諸規定をあたえられる。マルクスは外化と疎外とは相互媒介的に発展していくと主張しているのである¹⁹⁾。

こうして歴史を構成する外化・疎外の進展過程そのものが、「人間的な共同体」を、「反省(Reflektion)」によってではなく、「諸個人の窮迫(Not)とエゴイズムによって、即ち彼らの定在そのものの活動を通して」、「それ自身が個人全ての本質であり、彼ら自身の活動、彼ら自身の生活、彼ら自身の精神、自ら自身の富であるような、社会的組織(gesellschaftliches Wesen)を創造し、産み出すのである」と規定されている²⁰⁾。この「外化の歴史全体と外在態の奪回全体」として、「世界史の行為を概念的に把握する能力」²¹⁾は、マルクスがヘーゲルに

負うところであるが、マルクスは歴史の「非対象化(=疎外)、外化および外化の止揚」を、「疎外された労働」=「労働の分割」と「外化された労働」=「労働の配分」との二動因から、それらの「活動総体」の「歴史の結果」として、自然必然的な歴史的な諸形態の転化過程として理解し、その発生的叙述方法の顛倒態を、『精神現象学』の中に見い出したのであった。しかもかれは、「感性的欲求」と「感性的意識」の二側面の統一である「実在的な科学」=「現実的な科学」の立場から欲求と活動の、苦悩と情熱の弁証法における労働の側面を看過したフォイエルバッハの「心理学」を批判し、また感性的な対象的な労働を看過して、「意識の運動」を諸契機の媒介的止揚による「諸契機の総体性(Totalität)」にとらえて、抽象的・形式的に歴史を叙述したヘーゲルの「否定性の弁証法」を、批判的に摂取したのである²²⁾。しかも感性的な欲求と労働の運動が展開する現実的な、歴史的諸形態をヘーゲル流の「純粹概念的に把握することとしての知」の立場においてではなく、「知はただその生成過程において、あるいはその諸契機において、意識そのものに属する側面に従って示されるべきである」の立場から、「生成過程における」感性的な「意識の諸形態」として把握しようとしたのである²³⁾。しかしながら、このようにヘーゲルの対象化の弁証法を、疎外化と外化による私的所有の運動論、およびその叙述の方法に転化し、我ものとしたその理論的作業の場は、メガの標題「欲求・生産・分業」でつきあつたアポリア解決への理論課題への解決方策を求める過程であったことを看過してはならない。つまり、「機能しつつある資本の浪費的富への全面的勝利……私的所有の産業資本への転化」²⁴⁾という眼前の

歴史的事実を、分業論的に「労働の分割」(Teilung der Arbeit)と「労働の配分」(Distribution der Arbeit)の二概念から叙述しようとするためのヘーゲル批判であったことを、である。また産業資本と賃労働という私的所有の歴史具体的形態を分業論的に、労働の配分と配分から展開すること、それが以下の課題である。

すでにみたように、労働の二重性の経済学的な発展形態は、分業の二重性として現われる。自然と人間の「実在的な類的活動」、人間相互間の「類的組織としての人間活動」の「疎外され、外化された形態」は、「労働の分割」と「労働の配分」=「交換」である。これらの「結合」としての「分業(the division and distribution of labor)」²⁵⁾こそは、「富生産の主要な原動力(Hauptmotor)」²⁶⁾であり、「分業は労働の社会性(Gesellschaftlichkeit)についての国民経済学的な表現」²⁷⁾。「労働の分割と交換とが私的所有の活動形態(Gestaltung)である」ということは、形態(Gestalt)としての私的所有は、分割と交換に根拠づけられるということである²⁸⁾。「類に適合した活動」、および「類に適合した組織力」としての分割と交換の把握²⁹⁾と、「類」=「社会」=「人間達の活動総体」という解明は、必然的に「社会性格が私的所有の運動の普遍的性格」となり、私的所有の運動の普遍性は、その発展の極である。「工場制度(Fabrikwesen)」³⁰⁾において、「分割」側面からは、機械制大製造業の「生産諸力(Produktionskräfte)」として、「配分」の側面からは、世界全体への「市場を拡張」する能力=「交換能力」として現象してくるということへと展開することとなった³¹⁾。すなわち、相互譲渡の過程における商品・貨幣関係の世界市場にまでの拡大と、労働者側の一方的譲渡とし

ての「反比例的關係」は、労働過程での労働者の「窮乏」と資本の「集積」「集中」の関係、隷属と支配の関係として、「外化された労働」の歴史的な現実の形態として、マルクスにより叙述されることになったのである。これに形態規定を与える「疎外された労働」は、「感性的意識」の疎外としての活動と自己確証の分裂として、すなわち『第1草稿』の疎外の四規定で示されるような、資本に「包摂」せられた労働の「一切の疎外」として歴史的な現実の問題となった。マルクスの眼前に進行しつつあった一切の「経済的疎外」(それは第一には、信用制度にまで発展している「貨幣制度」、世界市場にまで展開した商品交換という二面性における「外化された労働」であり、第二には世界史的な力にまで高まった「工場制度」における「産業資本」³²⁾と、抽象的な機械にまでおとしまられた「工場労働」の二面における「疎外された労働」の進行)そのものが、同時に「一切の疎外」の止揚の過程であることを、マルクスは見ていたのである。「全革命運動はその経験的基礎をも、理論的根拠をも私的所有の運動の中に、まさに経済の運動の中に見出す」といい、また「疎外の止揚は疎外と同一の道を歩む」というかれのPrinzip(基礎=原理)の意味内容は、以上のような思考発展とからめてとらえられねばならないのではなからうか。

分業の発展の頂点である大機械工業において、「分業と生産物の豊かさ」、「分業と資本蓄積」とが相互規定的であること、土地とちがって機械は、人間労働力によるもの=労働そのものに自己の根拠をもつ産出物、したがって全面的に「人間主義的」な側面をもつと同時に「自然主義的」側面をもつことを経験的基礎=理論的原理(Prinzip)とする対象であるからであ

る。感性的意識と感性的欲求に根拠をもつ実在的な科学は、自然＝人間＝社会の存在構造の社会的側面における「経済学」と、その自然的側面における「自然科学」として、解放主体の手において展開をうけねばならないし、労働者の実践的運動と結合せられることによって、「自然科学は工業を介して、益々実践的に人間生活の中に入りこみ、それを改造し、そして人間的解放を準備したのであるが、それだけ益々直接的には自然科学は、非人間化を完成させずにはやまなかった」³³⁾。まさに近代国民経済学は、労働を富の本質とすることで労働者の解放を準備したが、それはしかし直接的には労働者と資本家の非人間化を完成させたのであった。

マルクスは「富に対する社会結合体の支配」の実現のための理論的実践（「特殊な生産様式」）を、自然科学的技術論的側面に注意を払いつつ、自己の生涯の課題を、経済学批判の完成に置いた。われわれは活動＝分業としての私的所有の二重性（分割と交換）の中に、そうした違見が存していることに改めて注目したい。彼は「人間的な生活がその実現のために私的所有を必要とした (bedürfte)」と述べてその肯定的理解を示し、人間的な生活の実現が、「今や私的所有の止揚を必要としている」と主張している³⁴⁾。ここに分業論としての疎外・外化論、分業論としての私的所有論、そして分業論としての歴史認識の萌芽的な理解がみられるのであり、また「疎外された労働」と「外化された労働」の労働の二重性が、経済学的諸範疇の発生的批判的展開のための基底的・基軸的な「二動因」であるという着眼が前面に浮きでてくるのである。

1) MEGA., I, 3, SS. 531~2, 『ノート』 88~9 頁。

- 2) *ibid.*, S. 538. 同上書, 101 頁。
 3) *ibid.*, S. 437. 同上書, 29 頁。
 4)~7) *ibid.*, S. 538. 同上書, 102 頁。
 8) *ibid.*, S. 532. 同上書, 89 頁。
 9) *ibid.*, S. 539. 同上書, 102 頁。
 10)~13) *ibid.*, SS. 539~40. 同上書, 102~5 頁。
 14) *ibid.*, S. 540. 同上書, 104~5 頁。
 15) この段階で、外化＝譲渡論も二重のものとなってくる。一方では、相互譲渡の過程として、流通における等価交換から商品および貨幣論へ展開しうる譲渡論がある。他方では、一方的な放棄を強いられる側と他人の労働生産物を獲得する側との、隷属と支配との函数的関係にある、生産過程における搾取関係としての譲渡論がある。この後者に関しマルクスは、スミスの「自然率 (taux naturel)」をリカード的観点から批判している。すなわち、「リカードの学説が現在の状態に対して重要な意義をもつのは……蓄積は、スミスの説とは反対に、競争と共に労賃がますますおしきげられるという結果を及ぼす」点を指摘することのなかにあると。(cf. MEGA., I, 3, S. 501., 511. 『ノート』〈リカード評註〉 51 頁および 56 頁参照。)

『草稿』においても、「労賃と資本利子の反比例的關係……（流通過程で）消費者をだますことではなく、（労働過程での）資本家と労働者のだましあいこそ正常な関係」だとリカードがみている点をマルクスはリカードのスミスへ対する理論の優位性だと評価している。(cf. *Ergänzungsband*, I, S. 524. 『草稿』, 110 頁参照。但し括弧内は引用者の挿入文である。)

- 16) MEGA., I, 3, S. 540. 『ノート』, 105 頁。
 17) *ibid.*, S. 533. 同上書, 91 頁。
 18) *ibid.*, S. 539. 同上書, 102~3 頁。
 19) *ibid.*, S. 539. 同上書, 103 頁。
 20) *ibid.*, S. 536. 同上書, 96 頁。
 21) *ibid.*, S. 577. 同上書, 205 頁。
 22) *Ergänzungsband*, I, SS. 574~585, 『草稿』, 200~19 頁。
 23) マルクス, 「ヘーゲル『精神現象学』最終章についてのノート」(『草稿』, 229 頁。)
 24) *Ergänzungsband*, I, S. 556. 『草稿』, 166 頁。
 25) “the division and distributin of labour” としての「分業」概念はジェームズ・ミルのものであり (cf. J. Mill, *Elements of Political*

Economy., 3 rd, edition, 1844, 渡辺訳, 春秋社, 昭和23年, 77頁参照。), “the division of labour” の概念は, 周知のようにスミスのものである。スミスは交換から分業を展開し, ミルは分業から商業を展開する。(cf. *Ergänzungsband*, S. 561. 『草稿』, 175頁参照。)

- 26) 27) *Ergänzungsband*, 1, S. 557. 『草稿』, 168~9頁。
 28) 29) *ibid.*, SS. 561~2. 同上書, 175~6頁。
 30) *ibid.*, S. 533. 同上書, 124~5頁。
 31) *ibid.*, S. 559. 同上書, 171頁。
 32) *ibid.*, S. 533. 同上書, 124~5頁。
 33) *ibid.*, S. 543. 同上書, 142頁。
 34) *ibid.*, S. 562. 同上書, 176頁。

一応の要約と展望

以上においてわれわれは, これまでの疎外論的評価に対して労働の二重性論を復権させ, この見地からする『パリ草稿』の全体像を再構成しようと試みてきた。またこのことによって, バリ時代の経済学批判を分業論的歴史理論として再把握することを主張してきた。われわれの主張を要約すれば, 自然的存在であり, かつ社会的存在である人間の活動総体およびその運動として, 自然=人間=社会の歴史を総体的に把握する視座こそが, 『パリ草稿』における政治経済学批判の基軸点であると。このような観点からすれば必然的に, ブリッセル時代の『ドイツ・イデオロギー』とこの草稿との理論的関連が再度問題となる。ただしこの小論は, 研究素材を『パリ草稿』に限定しているので, この問題についての論究は残された課題である。そこで, ここではただ歴史の研究が分業論的唯物史観をもたらしたというよりは, 『パリ草稿』での労働の二重性論からする萌芽的な分業論的歴史把握が, 歴史的素材の研究とあいまって, 『ドイツ・イデオロギー』におけるマルクスの分業展開史としての唯物論的歴史把握¹⁾を導き

出したのではなからうかという疑問を提出するにとどめたい。

以下, 『パリ草稿』における, 同時代の共産主義者達のそれと区別されるマルクスの労働論的歴史理論の独自性をすこし見方を変えて論じよう。

「文明化=市民化された社会」(zivilisierte Gesellschaft) は分業の高度化によって発展し, そのことが本源的な自然たる人間と土地までも商品化し, 全世界の一切の存在と思惟を産業資本の一元的支配のもとにおく。ここでは, 自然=人間=社会=の一切の思惟と存在が顛倒され, 倒錯して現われる。マルクスは, 「思惟と存在とは確かに区別されてはいるが, しかし同時に, 相互の統一の中にある」²⁾ とし, 両者を「エネルギー的な原理 (=基礎)」(energische Prinzip) にまで還元して理論的实践と現実的实践の二重性において把握しようとした³⁾。理論的实践における「特殊な生産様式」の顛倒性と倒錯性は, 経済的实践と「生産の一般的法則」との関連でとらえてはじめて, その実在の根拠が明らかにされる。それ故にこそマルクスは, 社会的諸現象の一切の矛盾を, 『国民経済学批判』において解こうとしたのであった。私的所有の完成態である「産業 (=工業)」が「工場制度」にまで高まるにつれて, 私的所有の矛盾は極点にまで達するのであるが, これに対応するかのようになり, 「スミス, セイを経てリカード, ミルへと国民経済学のシニズムは, 相対的に露骨さを増してくる」⁴⁾ とみたマルクスは, ここで, 労働の本質を根源的に把握し, 国民経済学者達の理論の皮相性を批判しようとした。エンゲルスはこの経済諸説を, 「この下劣で軽蔑すべき学説, 自然と人間へのこの恐ろしい冒瀆……ここにいたって, 経済学者の不道徳性はつ

いに絶頂に達せしめられている』⁵⁾ とみた。ヘスは「首尾一貫した経済学は、その財布の重さによってのみ人を評価する」と、欺瞞にみちた世界の詐欺、卑劣さ等を指摘した⁶⁾。

このような道徳的なイデオロギー的批判に対して、マルクスは「国民経済学は更に発展してゆくにあたって偽善を脱ぎすて……その科学がより徹底的に、より真実に展開し……産業の分裂的現実」⁷⁾ をより冷徹に分析するに到ると、その相対的進歩性を認め、またこの理論とその基礎的経済過程との関係を、近代国民経済学は「私的所有の現実的エネルギーおよび、運動の一産物とみなさるべきだということ、同時に他方では国民経済学はこの産業のエネルギーと発展とを促進し、讚美して意識上の一つの力にまでした」⁸⁾ と述べている。ここにも理論的実践と経済的実践が、エネルギーな矛盾関係にある事を、マルクスは認識していたと言えるのである。

マルクスの社会解放＝人間解放理論の特殊性は、このように「理論的基礎」と「経験的基礎」との二重の原理＝基礎が、「解消へとかりたてるエネルギーな関係としての私的所有」⁹⁾ の関係として、理論的過程と物質的過程との統一において、歴史転換の原動力として、把握されていることにあった。この独自性は、当時のエンゲルスとヘスなどの、なおフォイエルバッハ的残滓を残す共産主義理論と対比すれば、一層良く理解できるであろう。エンゲルスは「類的意識」の立場から変革を要求している。つまり「類的意識のない細分された原子としてではなく、人間として意識的に生産せよ、そうすれば諸君はこれら全ての人為的で維持したい対立をのりこえるであろう」¹¹⁾ と。ヘスは「愛による結合」を「愛と理性の声に耳を貸

す」¹²⁾ ことを一般的に呼びかけることによってのみ実現しようとしているのである。

ついでながら、マルクスの変革の立場、「真の活動的な所有」¹³⁾ 再建の文明史的意味について、すこし述べておこう。彼は「原初の状態」＝「共同体」から「文明化（＝市民化）された社会」への転化を、剰余生産物の交換によって発生する「私的所有」の端緒的成立、それを前提とする「営利労働」としての「疎外された労働」の発生、さらに両者が「交換」と「労働の分割」に転化することから、説明した。そのさい、文明社会の発展と分業の高度化が相互媒介的に促進しあうことが私的所有の物質的運動過程であると把握していたのであるが、その運動の最後に、産業資本と賃労働とのネガティブな敵対的矛盾関係が、普遍的な世界史的力にまで高まった「交換能力」と「生産諸力」というポジティブな基盤の上で、「人間的な共同体 (Gemeinwesen)」が再建されるとしている。「われわれの文明社会のこの『野蛮人達 (Barbaren)』のもとに、歴史は人間の解放のために実践的な契機を着実に準備しているのである。……自然と社会の主要な原動力は、魔法の動力であり、激情の引力であり、決して反省することのない引力です」と、あまりにも観念的ドイツ人であるフォイエルバッハに宛てた手紙の中でマルクスは語りかけている¹⁴⁾。ここでは『独仏年誌』における哲学とプロレタリアートとの結合の意欲に代わって、労働者達の「社会的結合の欲求」と「交換能力」・「生産諸力」との結合の理論が、すなわち社会的結合による自分達の諸能力の自主管理と、歴史発展の理論が表明されている¹⁵⁾。ここにマルクスの「自由な労働と自由な享受とを通じて、再び人関の真の人格的所有」が、「人間的な共同体」と同時に再建され

る「連合 (Assoziation)」¹⁶⁾ の実現の根拠が、構想されていることをみることができるのである。そしてまたここに、ローマ法的私的所有権に対する「ゲルマン的権利」としての「部族法 (leges barbarorum)」による共同体的な「歴史的権原 (Titel)」¹⁷⁾ と自己の労働に基く享受という「人間的権原」¹⁸⁾ の統一としての「社会の普遍的権利」¹⁹⁾ の立場からする人間解放の理論が、歴史的・客観的な現実的根拠を与えられていることをもみることができるのである。これらの見地は、豊富な歴史的素材の検討をふまえての『ドイツ・イデオロギー』において、歴史段階論的な見地から一層堅固な位置づけをあたえられ、またより包括的で具体的な姿をもって展開されることになる。

- 1) 望月清司 「『ドイツ・イデオロギー』における『分業』の論理」、『思想』1968年12月号を参照。ここでは、エンゲルスとマルクスの「持分問題」にふれつつ、前者の歴史把握を所有形態史的であり、後者のそれが分業展開史的であると論じられている。
- 2) *Ergänzungsband*, I, S. 539. 『草稿』, 135頁。
- 3) *ibid.*, S. 546. 同上書, 148頁。
- 4) *ibid.*, S. 531. 同上書, 121頁。
- 5) F. Engels, *Umriss*, in *Werke*, 1, S. 518. 『全集』, 第1巻, 562~3頁。
- 6) M. Hess, *Über das Geldwesen*, in M. Hess. *Philosophische und Sozialistische Schriften*, 1837~50, Herausgegeben und eingeleitet von A. Cornu u. W. Mönke, Akademie-

Verlag, Berlin, 1961, S. 335., 344. 山中・畑訳 『初期社会主義論集』, 未来社, 1970年, 129頁と152頁。(以下, *Schriften* および『論集』と略記する。)

- 7) *Ergänzungsband*, 1, S. 531. 『草稿』, 122頁。
- 8) *ibid.*, S. 530. 同上書, 119頁。
- 9) 10) *ibid.*, S. 533. 同上書, 126頁。
- 11) F. Engels, *Werke*, 1, S. 515. 『全集』, 第1巻, 559頁。
- 12) M. Hess, *Schriften*, S. 348. 『論集』, 160頁。
- 13) MEGA., I, 3, S. 547, 『ノート』, 118頁。
- 14) W. シュッフェンハウアーの発見による, 44年8月11日付けの手紙。in W. Schuffenhauer, *Feuerbach und der junge Marx*, S. 207.
同様の叙述が『ミル評註』でもみられる。「あの人間の真の共同体は、決して反省によって生ずるものではない。おもうに、それは諸個人の窮迫 (Not) とエゴイズムによって、すなわち、彼の定在そのものの活動をとおして直接にうみだされるのである。」(cf. MEGA., I, 3, S. 536. 『ノート』, 96頁参照。)
- 15) *Ergänzungsband*, I, S. 553. 『草稿』, 162頁。
- 16) *ibid.*, S. 508. 同上書, 79~80頁。
- 17) 『ライン新聞』時代にマルクスは貧民の慣習的権利の根源をさぐって、ゲルマン法の考察をしている。(cf. *Werke*, 1, S. 117. 『全集』, 第1巻, 135頁参照。)
- 18) 19) 『ヘーゲル法哲学批判・序説』で、マルクスはロック以来の労働に基く所有の自然法的権利を考察し、そこに労働者の社会的権利の源をみとめようとしている。(cf. *Werke*, 1, SS. 388~90. 『全集』, 第1巻, 425~7頁参照。)